The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Gallia　54号　ESSAIS
Author(s)	
Citation	Gallia. 2015, 54, p. 125-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61945
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

赤木昭三先生の思い出

柏木　隆雄

赤木先生のご逝去を、奥様から知らされたのは昨年暮れ。少し体調を崩され、検査入院のつもりが、そのまま退院されることがなかった、という。奥様は突然のことで驚かれたことだろう。いや本当に驚かれたのは赤木先生ご自身だったに違いない。先生はいつも体調を気遣っていらして、無茶は絶対されない方だった。懇親会などの席で午後8時ごろになると、私に目配せだけして誰にも知らせずにすっと帰られたが、それは無用の時間を節約するお気持ちと、ご自分の体をいとわれたからだろう。先生にとって時間を無駄に過ごすことほど勿体ないことはなかった。私なんぞのように、酒を飲んで夜遅くまで騒ぐなど愚か以外の何物でもなく、ましてそれで体を毀したら馬鹿の骨頂となる。慎重な先生が倒れられたのは、やはりご年齢のせいか。そういえば雑司ケ谷の散歩の折に躓いて、遠出を控えるようにしているとお便りを頂いたことがある。

思えば先生と初めてお会いしたのは、阪大文学部2年のフランス語中級のバルザック『ことづて』の教室だ。後年バルザックを専門にするとは思わぬながら、赤いデザインの薄い教科書は、その挿絵が今も浮ぶ印象深い授業だった。今回寄せる拙論が『ことづて』をめぐるものになったのにも、多少の因縁を感じざるを得ない。その試験の監督の際、教卓に座って32折くらいの小型本を片手に、金属製の小さいペーパーナイフで頁を切りながら読まれているお姿はよく覚えている。本当に本がお好きで、片時も本が離せない、という感じで、じつに恰好よかった。

中級と同時にフランス文学演習というクラスで、教科書は渡辺一夫編注、モーリヤック『小説家と作中人物』（白水社）を教わった。そこでの先生の徹底的なテクスト解釈に、大学に来た！と実感したものだ。当時文学部の教養課程2年生は英語週3回、第二外国語週3回、それに英文学、独仏共に別に週2コマ演習のクラスがあり、さらに外国人の会話クラスが1回。私は英文、仏文のクラスを計4つ取っていたから（そのほかに習いもしないのに独文の方も2クラス取った）、ほとんど語学漬けの毎日だったが、結局それらのほとんどは、ものにならないで現在に及んでいる。しかし二年生の演習クラスで、英文学の藤井治彦先生、仏文学の赤木先生の教えを受け、以後先生方がお亡くなりになるまで、途切れることなく師事できたことは、生涯の幸せであった。

当時仏文科は例年3年生の夏休みに5冊仏語原本を読んでレポートを書くことが課せられており、私はメリメ『トレドの真珠』、フロベール『聖ジュリアン伝』，リラダン『ヴェラ』、バルザック『ゴリオ爺さん』それにボードレール『悪の華』の5作だったか。とにかくそれらを刀根山寮の暑い一室で読んでレポートを書き、研究室に提出する前に、教養部にいらした赤木先生にお送りしたところ、びっしり感想の書かれているお葉書を受け取って感激した。以後亡くなられるまで、論

文や訳書、著作を送れば、すぐご批評やご注意をいただいた。私だけでない。皆同じように先生から厳しくも温かいお葉書を受け取っていると思う。

仏文科主任教授になられた先生がご退官になるまで、助教授としてご一緒した9年間は、じつに幸福な日々の連続であった。赤木先生は未熟な私に全幅の信頼を寄せられて、研究室で購入する書籍は、カタログを見ながら二人で相談する。先生の見識はきわめて広く、深かった。私が挙げる本について、フランスの書評ではどう書かれていましたか？と尋ねられて、そんな用意などしていない私は大いに面喰い、何度も恥ずかしい思いをした。後年注文先の書店から、阪大仏文の書籍はとてもよく考えられていて感心しますと言われて、赤木先生の周到な購書を実感した。

先生ご自身のご蔵書の豊富で貴重なことは、想像するに余りある。君の阪大退職の記念に『ボヴァリー夫人』の初版を上げようと思っているが、書架が乱雑になってどこにあるのか今わからない。見つかったら送る、ということで、恐縮しつつ待っていたのだが、何か月かして『感情教育』やリラダンの初版本まで一緒に届けて下さった。『ボヴァリー夫人』初版など、皆の垂涎の貴重書なのに、どこに置いたか見つからないと事も無げにおっしゃる。それだけ蔵書が豊かであり、ご専門の17世紀、18世紀の貴重本がいかに多いかということで、驚くほかない。それだけ先生の学問が博大であることの証しでもある。

思い起こせば先生の温容がすぐ目の前にある。映画を見つけているせいか、私はついつい知人を俳優に見立ててしまう。原亨吉先生は名優加藤嘉にそっくりで、赤木先生は『シネマ・パラダイス』でも好演したフィリップ・ノワレに雰囲気が似ている。パイプをくゆらせ、一見飄々としながら愛情深く、そして思慮深い。先生のにこやかな、優しい笑顔にお会いできないのは誠に寂しい。

（大手前大学学長・大阪大学名誉教授）

卒業記念写真。年代不詳。赤木先生は右から一人目。

赤木先生

粕谷　祐己

振り返ってみるまでもなく、わたくしの人生で赤木先生以上に御恩をいただいた方がおられないことは明白です。わたくしの拙い修士論文を不思議に気に入られたせいか、あるいは先生一流の気紛れか、阪大仏文の助手にしていただき、その後のわたくしの人生を開いてくださったのは赤木先生でした。その先生の御逝去もしらず、のほほんと日々を送っていた自分とはいったいなんなのかと思います。もっともこのようにさっと我々の前から雲がくれなさったのはいかにも赤木流ではあるなあ、とも思えるのです。フランスに留学する学生さんに、お爺さんは死ぬものだから若い研究者と友達になりなさいよと言っておられた先生ですから。

“Esprit fort” というのがわたくしにとっての先生のイメージでした。院生として先生に学んでいて、助手として先生にお仕え――という言葉を使わせていただきたいです――していて、あんまり格好のよくない種類の人間的、社会的真実をシニカルに、しかも大阪大学教授としてののりを越えずにてれっと言い切る、その先生の見解の切れ味の良さに周囲のものはよく一撃で毒気を抜かれたものでした。

現在、日本の大学におけるフランス語教育、フランス文学研究は存亡の危機にあると言えますが、この事態が来たるのを赤木先生はちゃんと予期しておられ、助手のわたくしと二人のときにはそういう未来像を例によってててれっと言われて、わたくしはどぎまぎするばかりということもありました。でも、だからどうすべきとわたくしに言われるでもなく、慨嘆、諦観の態度をお取りになるわけでもなく先生は世を静かに、そしてクリアに見ておられました。

やはりこれは十七世紀や十八世紀のフランスという現代世界の原点となっている時代を生涯の研究の対象に選ばれたことで得られた幸福なのだと思います。いろいろ困難の多い人生を過ごされたと思われるのですが、廊下を歩いているときなどよく楽しげに鼻歌を歌っておられた先生は、何もなくても基本的に幸せな心持で日々を送るすべを知っておられました。

わたくしからは先生になんの御恩返しもしないばかりか、最近は全くお会いする機会もなくしてしまっていたのですが、それでも先生はわたくしのような恩知らずで愛想のない人間でもそれなりに認めて下さるに違いないと、今でもなんとなく信じています。たしかに先生がいつまでもお元気で、こちらの方さえその気になればいつでもお会いできると思っていたわたくしが愚かだったのは間違いないのですが。御恩返しは、日本でフランス文学研究がそんなにみじめな落ち込み方をしないように必死でがんばることだと、勝手に決めさせていただきます。

先生、人生をひとついただいて、ありがとうございました。

（金沢大学助教授）

初めてのプルーストの講義の思い出

加藤　靖恵

この春に赤木先生の訃報に接し，20 数年ぶりに開けた箱の中に，進学したての 3 回生だった 1986 年前期の赤木先生のプルースト演習ノートがあった。初回の概論に続き，第 2 回目は，『見出された時』で語り手が陽に照らされた 3 本の木に向かって語りかける重要な場面だ [1)]。各語のニュアンス，動詞の法や時制の効果を詳しく教えていただいたことが，切れ切れのつたないメモからも伝わってくる。

語り手の乗った列車は「野原の真ん中（en *pleine* campagne)」，「自然のただ中（en *pleine* nature)」に止まる。「それなのに（eh bien : 詠嘆調だがここではつくりものめいた印象)」彼の心は自然の美に対して冷えきっている。この箇所からは詩情や感動が伝わって来ず，わざと散文的に書かれている。木々は常に人に語りかけているのだが，私の心は閉ざされて「聞こえない」。「constater（私の目は認める)」という知的，感情が不関与で風景描写には適さない動詞，「savoir」のような客観的で冷めた動詞が続く。それに対し木々は擬人化されている。「front lumineux」の front には顔という意味もあり，また「幹　(tronc)」も人間の胴体を表すこともある。条件法が効果的に用いられ，「les années où j'aurais peut-être été capable de la chanter」という表現には，苦い悔恨がこめられる。「Si j'avais vraiment une âme d'artiste」以降では，急に描写が詩的になり，比喩も導入される。 それに反して，「peut-on espérer transmettre au lecteur un plaisir qu'on n'a pas ressenti ? 」という一文は，大言壮語が無いところに本当の絶望が現れ，淡々と寂寞と描かれている。その他にも「une observation humaine possible *venant prendre* la place […]」の現在分詞は関係節で置き換えられるが，ここで qui を導入すると，文の構造が複雑化し，音もきつくなるのでフランス人は避けたがる，しかしプルーストは通常それをあまり気にしていないようだ，と作家の文体の癖にも言及された。最後に，「Un peu plus tard j'avais vu avec la même indifférence les lentilles d'or et d'orange dont le même soleil couchant *criblait* les fenêtres d'une maison」という文の cribler について，3 つのフランス語の例文が板書され，視覚にとどまらず，穴をあけるように打ちつけるような光の激しさを描いていると説明された。

90 分でプレイヤッド版にして 3 分の 2 ページを解説していただき，最後の文から大過去が続く理由を考えるという宿題がでた。5 月 23 日の講義冒頭で，この場面が語り手への文学的啓示の到来という大展開の直前であることを予感させ，「翌日」を基点とした大過去であり，実際に次の場面は単純過去になり，文法的にはこの箇所も単純過去でよいはずだと説明された。その折，「lentilles」という語を先生が「斑点」と訳されたが，太陽があたってガラスにできたのだから「そばかす」と訳しては，と妙な質問をしたようだ。そばかすはフランス文学ではきたな

1）*A la recherche du temps perdu,* «Pléiade», 1987-1989, IV, pp. 433-434.

らしいイメージで，またパリ近郊では太陽があまりあたらないのだ，という先生のご回答が書き留めてある。学生の支離滅裂な反応もやわらかく受け止めてくださった先生の寛大さをなつかしく思う。

（名古屋大学文学研究科准教授）

原亨吉助教授、文部省在外研究員として渡仏。大阪空港にて見送る。
赤木先生は左から二人目。1963 年 5 月 20 日

赤木先生と私

川本　真也

赤木先生と初めてお会いしたのは、薄暗い研究室の中でであったと思う。何か事務的な用件で判子をいただき、いくつか言葉を交わしてその場を辞した以外、ほとんど記憶に残っていない。それから学部で 2 年間、面倒を見ていただくことになった。指導では苦言を呈されることもあったが、その奥に人を育てるご意思が汲み取れ、人に対する尊厳のようなものが感じられた。ご退職の折には、後輩と二人、神戸のご自宅に赴き、本を運ぶお手伝いをした。重たい箱を手に、玄関前の階段を何度も上り下りし、その後、巻き鮨をいただいた。人と人との繋がりに温もりがあった、古きよき時代の残照である。研究室からは先生のお姿はなくなったが、港を見下ろす書斎で読書されている風景が思い浮かぶこととなった。そして、年に一度賀状を交わす間柄となった。毎年、遅くなっても、丁寧に筆書きした年始の挨拶が届いた。時には、論文を面白く読んだ、と書き添えていただくこともあった。学位取得のご報告にも、丁重なお返事をいただいた。ところが去年の初め、お返事をいただけなかった。賀状では、人生の岐路に立たされた心境を、少し長めに認めていたが、そんな矢先の訃報であった。

先生の講義で記憶に残っているのは、17 世紀文学を扱った普通講義である。古い「クラシック・ラルース」をお譲りいただき、ラシーヌを読んだ。また、サン＝タマンのフレーズは、先生の朗読の抑揚とともに今でも耳に残っている。「薪の上に腰かけて、パイプを手に…」で始まる詩である。業績や出世といった、俗世間の垢に汚れる前の澄んだ文学を、私は確かにそこで呼吸していた。他にも、パスカルの特殊講義が記憶に残っている。私は何故かパスカルを専門にする方とご縁があり、その方々を通してすでに文章はかなり読んでいた。完成度の高い均整の取れた文体、真理を衝いた誠実な思想は、今の世に蔓延る軽薄、狡猾な打算家たちに煎じて飲ませたい解毒剤である。授業は、私にとって、この思想家との再会の場となり、その生涯について詳しく学ぶ機会となった。私が専門を決めるとき、赤木先生は、「君はカミュが好きだったね」とおっしゃられた。今から思えば、有難いお言葉である。そして、それは一つの岐路を通り過ぎた瞬間でもあった。人生の意味や倫理を、あれこれ考える性癖が高じて文学の世界に導かれた自分だが、思想の分野では、理知にではなく情に訴えるルソーに惹かれていた。先生が退職される折、まさしくそのルソーの一冊をいただいた。「悪いエディションではないから…」とおっしゃられて、黄色い本を手渡された。兎を連れて島に漕ぎ出す、ルソー翁が表紙の本である。今、何か、旅人が遠い旅路の空の下で、一宿一飯に与った人の訃報を耳にしたような、そんな心持ちでいる。

（立命館大学非常勤講師）

ジャン・メナール教授が来日し、大阪大学で講演。
奈良東大寺にて。1971 年 10 月 28 日

遠くて近くて、近くて遠くて

小坂　美樹

赤木先生について、私が知っていること、語れることは、それほど多くない。フランス文学専攻を決めて大学三回生となり、四回生で卒業論文の指導を受けた。直接に教えを請うたのは二年間であり、それはあまりにも短い。それでも「間に合った」とつくづく思う。「赤木先生に教わりました」と言える最後の学年に属することのできた幸運をしみじみ感じる。もっとも、先生としては劣等生の私など教え子の数に入っておらず、今頃、苦笑されているかもしれないが。

初めて先生の授業を受けたのは、まだ専攻を決めかねていた二回生の時だった。テクストは『人さまざま *Les caractères*』。honnête homme や bienséance といった当時の価値観の詳しい説明の後、一文一文を確かめながら読み進めることで、先生は、フランス語もままならない私たちをフランス十七世紀へと時空を越えて導いてくださった。とりわけ記憶に残っているのが粗忽者メナルクのおかしなふるまいというのが私らしくて情けないが、その時、フランス文学って面白いと進路を定め、今に至っている。先生の授業がなければ、おそらくフランス文学科に進んでいなかった。幸福な偶然にただただ感謝している。

先生の学術上の業績については、私には語る能力も資格もない。鋭く求めて、地道に進む。長く厳しい道を、先生は「学究」という言葉そのままに体現されていた。退官時に「まず、何が一番なさりたいですか」と愚かにも尋ねてしまった。先生は、穏やかに、しかしきっぱりと「勉強です」と答えられた。笑顔の奥から「凄み」のようなものが伝わってきた。

先生はいつも遠かった。威圧感などどこにもないけれど、先生には別の世界が見えているようで、その世界に興味はあったものの、とても近づけるものでないことは、二十歳の私にもはっきりと分かった。先生の世界はとても遠かったが、先生は必要な時、私たちの近くにすっと寄り添ってくださった。私たち学生のテクスト解釈や意見について、たとえそれが大きく的をはずれたものであっても、先生は頭から否定されなかった。まず「ほう」と一呼吸。眼鏡をかけなおして、その可否を一緒に検討してくださった。先生はすぐに答えを与えず、私たちの近くでともに考えることを決して厭われなかった。

大学院修了以降、お目にかかる機会は少なくなったが、年賀状などでは、毎年、短くも心に響く一言をいただいた。日々バタバタと過ごし（勉強の）時間がないとこぼす私への返信に、「勉強はまたいつからでもできます」とあった。先生の言葉は、「今できることに精進せよ」と同時に、いつからでもできるように「常に備えよ」との意味だと受け止めている。また、先生がお孫さんとレゴやプラレールで遊んだと記されていた時は、先生の世界にもレゴという語が存在することに、失礼を承知で親近感をいだいた。

先生は遠くへ行かれてしまったけれども、先生と私の距離は何一つ変わらない。遠くて近くて、近くて遠い。遠くに、そして高くに、真っ白な雪を頂く峰を仰ぎながら、先生のお話しやお姿を心にとどめておきたいと思う。

（1999 年博士課程単位修得退学）

卒業生との食事会。於蘇州園。1984 年 3 月 24 日。

赤木先生、たくさんのことをお教えいただきました！

小柳　公代

赤木昭三先生、長い間のご指導、ありがとうございました。

思い返せば、学部生の 3 年目が終わる頃、初めて先生にお会いしました。『パンセ』ラフュマ版についてお教えいただくために、大阪大学仏文教授であられた和田誠三郎先生の研究室へ参りました。そのとき名古屋大学教養部にいられた中川久定先生から、「阪大へ行くのなら、友だちの赤木くんに挨拶をしてきたまえ」と言いつかり、教養部の廊下で、中川先生からの伝言を申し上げたのでした。

大学に職をえてから、研究しつくされているというパスカルを去って 18 世紀に移ることを考え、その橋渡しとして『真空論序文』を読みました。ついでに未完断片状の『真空論』を訳してみると、そこでの羅列数字がどんな実験に基づいているのかという疑問に突き当たり、以来、橋を渡ることなく、17 世紀の、パスカルの、物理論文にとらわれたまま退職時が来てしまいました。これで大して悔いの無いのは、赤木先生から、「『真空論』をこんなに丁寧に読んだのはあなたが初めてでしょう」「実は歿後刊行論文だって、ほとんど研究されていません」と言われ、パスカル研究はまだ終わっていない、やる意味があるのだと知ることができたおかげです。

赤木先生に拙稿をお送りすると、ただちに懇切なコメントと適切な研究書の紹介を返してくださり、卒業生でもないのにずっとご指導いただきました。ご在職最後の年の5月にやっと博論を提出することができました。その日の夕方、先生は千里でビールをごちそうしてくださり、退職後はフランスで1年の大半を暮らすのだと、楽しそうに語られたではありませんか。赤木先生、世を去られるのが余りに早すぎるではありませんか？

このあとはどんな研究をしますか？と尋ねられた私は、「寛容」か「ユートピア」を、と答えました。たぶん、これらは赤木先生にもご関心の分野だったのではないかと推測します。「中川くんと私は一緒に勉強してきて、お互いにピエール・ベイルの前と後との時代で分けようと決めたのですよ、結局入り混じってしまいましたけれどね」と話されました。きっと、さらに18世紀研究を進める構想を抱いていらっしゃったのだと思います。本当にお心残りだったことでしょう。

最後になりましたが、富美子先生の優しさにも、この紙面を借りて感謝申し上げます。博論審査で合格と決まったことを、まっさきに知らせてくださったのは富美子先生でした。ハガキに「おめでとう！おめでとう！おめでとう！」と記して。

赤木先生、富美子先生、本当にありがとうございました。

（愛知県立大学名誉教授）

慕わしい人生の師

塩川　徹也

赤木昭三先生が仰ぎみる大学者であることは言うまでもない。わたし自身、先生から大きな学恩を蒙った。しかしそれ以上に、先生はわたしにとって慕わしい人生の師、人生の先達であった。

学生時代は東京とパリで送ったせいで、先生の授業を聴講する機会には恵まれなかったが、先生のお名前は、学部時代にパスカル研究を志したころからわたしの脳裏に刻みこまれていた。第二次世界大戦後渡仏した日本人留学生として、フランス文学畑で、奥様の富美子先生ともども、はじめてパリ大学の博士号を、それもパスカルに関する論文で取得されたと聞かされていたからである。1970年にパリに留学してまもなく、ソルボンヌの図書室で先生の論文を閲覧したとき、はたして自分にもこのようなことができるのだろうかと嘆息したことは忘れられない。

帰国して、仏文学会の大会の折にお目にかかって、ご挨拶したはずである。しかしその印象は薄い。あこがれと尊敬の対象である先生を前にしてこちらが気おくれしていたこともあるが、先生の方も控えめであっさりした対応をされたよう

な気がする。およそ先生には、後進を手懐けて一派をなすという雰囲気はみじんも感じられなかった。君子の交わりは水のごとしというのは、このような振舞いを指すのかと思った。年を経て、いくつかの機会、とりわけメナール版『パスカル全集』（白水社）の日本語版編集会議の席などで親しくお話しすることも出てきたが、先生は最年長で指導的な立場にあったにもかかわらず、控えめな態度を崩されることはなかった。しかしそれはもちろんご自分の考えがないということではない。先生が同席者の発言に黙って耳を傾けられ、時おり一言呟かれるのを聞くと、こちらの気持ちが見透かされているような気がして、恐ろしかった。

しかし先生はお手紙のやりとりでは、もう少し打ち解けた態度を取ってくださった。論文や著書をお送りすると、そのたびに適切なコメントと温かい励ましを頂戴した。事実に疑義あるいは誤りがあれば、ご指摘があった。解釈と見解の違いがあれば、率直に自説を示してくださった。一つだけ例を挙げれば、『フランス名婦伝』と『東インド航海日誌』の作者として知られるロベール・シャールは、有名な地下写本『マルブランシュ神父に提出された宗教上の疑義』の作者でもあるという説が近年有力になり、シャール研究者の間では定説になりつつある。先生はこの作者同定に慎重、というより懐疑的であり、ご著書の『フランス近代の反宗教思想』においてもその旨を記されている。わたしもそのことは知らないではなかったが、『東インド航海日誌』の日本語版の解説では、シャール研究の権威であるフレデリック・ドロフル教授の見解を引き継いで、あえて「著作のシャールへの帰属は決定的なものになった」と書いた。先生は早速お手紙をくださり、「決定的はないでしょう」とたしなめられた。フランスでもたとえば地下写本の研究者として知られるアントニー・マッケーナはやはり慎重な態度を取っているので、「決定的」というのは勇み足であった。その後、シャールの作品に慣れ親しみ、『宗教上の疑義』も大学院の授業で取り上げて読みこむにつれて、シャールが問題の写本の著者であるという心証はむしろ強くなってきたが、それでも先生のご注意は頭を離れない。それはわたしにとって、地道な実証研究を持続するための戒めでもあれば励ましでもある。

先生から二度ご依頼をいただいたことがある。一つは、『フランス近代の反宗教思想』の書評である。わたし自身、ご本をいただいて拝読し、強い感銘を受け、日本人の手になるフランス文学・思想研究の金字塔としてフランスの学界に紹介する手立てはないかと思案していた。そこに、先生の方からフランスの学術雑誌『十七世紀』（*XVII*e *siècle*）でご本の書評子を探しているので、引き受けてほしいとのお話が舞いこんだ。荷の重い仕事ではあったが、謹んでお引き受けし、一文を草した。忌憚のない感想も記したが、幸いにフランスの研究者、とくに地下写本の研究者の注意を引いたようで、先生にも喜んでいただけたのはうれしかった。もう一つは、先生が編集委員を務められた「ユートピア旅行記叢書」（岩波書店）に収められたある作品の翻訳のお誘いであった。意を尽くしたお手紙をいただき、心が動いたが、ほかに抱えている仕事があり、お断りした。最終的には、先生の弟子筋に当たる方の立派な翻訳が出たので、ほっと胸をなでおろした。

6年ほど前、『十七世紀』の編集長であったアラン・ジェヌティオさんから「日本特集号」の企画編集の話があり、わたし自身、日本における17世紀フランス文学研究の回顧を担当した。研究が飛躍的に発展した1960年以降の主要な業績をリストアップしてみると、赤木昭三の名前は、フランスの大学に提出された博士論文の著者、日本語で書かれた博士論文および研究書の著者、近世フランスならびにヨーロッパの旅行文学の叢書の編集者として三度登場することになった。複数の分野で登場する研究者はほかにはいない。先生が、日本の17世紀フランス文学研究において果たされた役割の大きさにあらためて目を見張った。余談になるが、この回顧では、フランスの学界に知られていない重要な仕事があれば、それも紹介したいと思い、野沢協先生のピエール・ベール研究を取り上げ、それに可能な限りの紙幅を割いた。それを、赤木先生はことさら喜んでくださった。先生の視野の広さと公正さ、度量の大きさに心をうたれた。

先生が大阪大学の定年を迎えられる頃、先生は二度目のお勤めはなさらず、研究三昧の生活にお入りになるという風のうわさが東京にも伝わってきた。いかにも先生らしいと思い、また同じ境遇にあこがれていた身にはうらやましかった。当時、阪大の定年は63歳だったと思うが、わたしの勤めていた東大は60歳であった。それから10年ほどして東大でも定年を延長することになり、わたしの場合は63となった。翌年いただいた年賀状には、「これで二度目のお勤めはせずにすみますね」という添書きが記されていた。先生がわたしをともがらと見てくださったことが無性にうれしかった。残念ながら何事にも不徹底なわたしは、いまだに俗世間のしがらみから完全に脱却することはできない。それでも先生の出処進退はわたしにとって常に模範であり続けている。

（東京大学名誉教授・日本学士院会員）

赤木昭三教授退官記念講演。1991年1月25日

赤木さんを偲ぶ

杉山　　毅

セキガクという名の夜空に輝いていた大きな星が墜ちた、というのが、仄聞ながら赤木さんの訃報に接したときの私の第一の印象であった。ここで仄聞と書いたのにはわけがある。私は自分が80歳を超えた時点で、ほどなく消え去るのみの身の上を熟考し、身辺整理のひとつとして、それまでご交誼をいただいていた方々に、今後は年賀の交換を控えさせていただくと申しあげた。赤木さんご夫妻はこの提案をお受けくださったので、以後ご夫妻からお便りをいただくことはなく、当然のことながら、赤木夫人からご主人の訃報を受けとることもなかった。それでも京都・宇治川近くに住む私の耳にも、どこからともなく赤木さんご逝去の報は聞こえてきていた。すぐにも私は赤木夫人へお悔やみの手紙を差しあげるべきところを、何故かそれをしないまま、これまで欠礼を重ねてきた。

昭和25年4月、私は大阪外大フランス語学科に入学した。当時の学科主任は和田誠三郎先生。しかしオリエンテーシオンを済まされると、創設後まもない阪大・仏文科に移られることになり、高槻の旧陸軍工兵隊跡の木造校舎から、足早に去って行かれた。私の学年は新制大学の2期生、1年上の1期生は大阪外事専門学校仏語科を卒業して新制大学に進まれた方が多く、その中には浅野（赤木）富美子、藤田（佐藤）保子、田辺保（故人）、後に俵萌子（故人）となって名を残す人、日本語教育の玉村文郎さんなど、多士済々であった。昭和3年生まれの赤木さんは、その時すでに外専を卒業して京大法学部に進まれ、これも仄聞によるのだが、抜群の成績で卒業されたが、官界、実業界、法曹界には目もくれず、和田先生のもとでのパスカル研究を進める道を選ばれ、以後、周知のことだが、パスカルの自

赤木昭三教授退官記念講演後のパーティー。1991年1月25日

然学から、資料の博捜をきわめたフランス近代思想史の研究に及ぶ、精緻で明快な優れた論考を残された。

赤木さんと親しく接するようになったのは、私が畠中・中原両先生のご厚意で外大・短期大学部に就職してからのことで、フランスから帰朝された赤木夫妻が、赤木さんは阪大に、夫人は外大に職を得られた頃のことである。年に数回開かれていた外大「フランス研究会」に赤木さんも顔を出され、専門の異なる私の稚拙な発表にもさりげなく鋭い質問をされた。後に私が広島大学に移ってからは、集中講義に来ていただいたが、その頃、広島カープが活躍していたので、私が勉強を忘れてその勝敗に一喜一憂していると申しあげると、呵呵大笑されたことが記憶にある。私はいまも赤ヘルの動静を気に病む凡俗の徒であるが、研究を最大の楽しみとされたかにみえる赤木さんには、野球観戦などに費やす無駄な時間はなかったに違いない。

ともあれ、ご自分には厳しく他者には寛容で、つねに温厚さを失われなかった、私には少し偉すぎて遠い存在であった赤木さんの、ご冥福を心から念じつつ、柏木さんのご依頼でしたためたこの小文を、これまでの欠礼へのお詫びの一文としたい。

（広島大学名誉教授）

赤木昭三先生を思い出すとき

髙岡　尚子

教壇に立って、フランス語やフランス文学を教えるようになって十数年、赤木先生のことを思い出すのはたいてい、己の不明を恥じる、あるいはそもそも己に備わっていないものの多さに愕然とするときである。ということは、少々情けないことながら、私はかなり頻繁に、先生のことを思い出しているということである。そして、情けないと同時に、強く励まされている気持ちにもなる。

先日も学生たちに、赤木先生のことを話した。先生の、学部学生に対する講義の一時間目は、参考文献を板書し、学生に示すことに費やされた、と。これは以前、*Gallia* の、赤木昭三教授退官記念号（31 号）にも書いたのだが、自分で研究をするようになり、その成果を、さまざまな形で外に出すことを求められるようになって、今あらためて、先生の講義の組み立てが、私の中に生きていることを感じる。

あるいは、学生の前に立つ自分が、どのように見えているのだろうと感じる瞬間がある。赤木先生の授業を受けていた頃の私にとって、先生はとても端正な佇まいの、繊細さと、さらには空気を振動させるような力強さを持った、要は、とても偉大な存在であった。美しい、あるいは「かっこいい」と言い換えてもよい。

その授業の「かっこよさ」とは、今から思うに、先生の放散される知と力のゆえであるとともに、それを聞く側の、求め、受け取ろうとする気持ちの合作であったであろうと。そう考えるとき、私は自分が学生にとって、どのように映っているのだろうかと思い、怖くなって立ち竦む。「かっこいい」わけはない。「かっこよく」なくていいが、少なくとも、醜くは見えていないか。害をなす、毒のようになってはいないか。

己の不明がもっとも顕著になるときのひとつが、学生の論文審査の場面である。私は学部を卒業するとき、カミュの初期エッセイを研究の対象に選んだ。あまり分量のない『裏と表』、『結婚』というエッセイ集における「幸福」の意味を考えていて、これでは証拠が足りないだろうと『幸福な死』を引き合いに出し、さらに、最後にはやはり『異邦人』にまで触れないわけにはいかないだろうと思った。赤木先生が、私の卒業論文の口頭審査の際に何を言われたか、具体的なことは覚えていない。だが、最初に私が書いたことの内容をまとめ、評価をしてくださったあと、「でも、私の『異邦人』の読み方は違います」と言われ、その後、先生の解釈を滔々と述べられたことだけは、忘れられない。果たして今、私は学生の研究に対し、あるべき誠実さでもって向き合っているだろうか。己の知識の不足と不明さを、何かのせいにしてはいないか。

大学院に進学したとき、先生は、「ジョルジュ・サンドはいいですね。読むこと、研究することがたくさんありますから」と言ってくださった。直接ことばをかけられる機会は、その後、ほとんどなかったし、これからはあるわけもない。だが、こうして思い出す。赤木先生、ありがとうございました。これからも、どうぞ、よろしくお願いいたします。

（奈良女子大学研究院人文科学系教授）

赤木昭三教授退官記念講演後のパーティー。1991 年 1 月 25 日

遠く離れての学恩

武田　裕紀

しばしば私は赤木先生の最後の弟子を僭称しているが、じつは二年生の時に、教養の学生にも単位が認められていた普通講義と、特別にお願いして出席させて頂いたパスカルの特殊講義の、文字通り末席をけがしていたのみであって、学部に上がった年にはすでに赤木先生は退官されていた。したがって私の受けた学恩は主に、学生として直接に受けた薫陶というよりも、拝読したご著書や、お送りした拙稿に対して小さい文字でびっしりとコメント下さったお葉書によるものであった。こうした事情は、「指導教官」に対する感謝や、場合によっては起こりうる不満や反撥の念よりも、むしろ「偉大な学者」に相手にしてもらえたという虚栄心の混じった喜びの感情を引き起こし、しかもそれほど頻繁なことではなかっただけにいっそう先生への敬愛の情を強化していく作用を及ぼしたように思われる。私の赤木先生への想いは、どこか一方的なところがある。

当時流行のニュー・アカにかぶれていたせいで、フーコーの『言葉と物』の理論を借りて古典主義の演劇理論を分析するという、なんともふるった卒論を提出した私は、地道な研究への覚悟はもてないけれども、書斎人に対する漠然とした憧れは残したまま、ある企業に勤めていた。初めての東京生活は刺激的で、お客さん扱いの新入社員にとっては会社生活もそれなりに物珍しかったが、休日には所沢にあった社員寮の友人とは距離を置いて、本屋に、映画館に、競馬場に、時には登山に、ひとりで出かけていたように思う。そんなある日だった、『フランス近代の反宗教思想』が所沢のそれほど大きくない書店に並んでいるのを見つけたのは。決して安くはなかったが、初任給を受ける身には躊躇するほどの値段ではなかった。そして、地道な資料の博捜こそが盤石の結論と思想的な強靭さを生み出すこと、ひとつの研究テーマを掘り下げることで普遍的な問題に達しうること、このことが日本人によって高いレベルで果しうることを、身をもって知ったのだった。その日から私は、デカルトの「欺く神」をテーマにした論文を準備し、院試に備えた。

赤木先生は、私が学生である間は優しかった。壮大な話にも耳を傾けて下さり、その後にやんわりと「とにかくきちんと書いてみるように」と付け加えられた。しかし、就職が決まってからは厳しかった。論文をお見せしても「その通り」とは決しておっしゃって下さらず、常に新たなる問題点を示された。そうすることで、決して現状に満足するべきではないという、プロの研究者としての姿勢を示されたのだろう。この数年は、デカルト書簡集の翻訳の進捗状況を、この難事業に貢献できる自惚れも込めて、新年のあいさつにご報告していたのだが、そのお返事はいつも変わらず、「とにかく完全なものを作るように、一度出版してしまうとあとから訂正は難しいです」という戒めの言葉であった。『デカルト全書簡集』

第二巻がようやく出版にまで辿りついたのは、お亡くなりになった三か月後であった。お見せできなかったのは痛恨の極みであるが、しかし、ずるずると作業を引き延ばしたのは、もしかしたら心のどこかで赤木先生の慧眼を畏れていたのかもしれない。

（追手門学院大学・准教授）

赤木昭三教授退官記念講演後のパーティー。1991 年 1 月 25 日

赤木先生とシンマイ編集者

橘　　宗吾

それは初めての出版企画だった。名古屋大学出版会に入社してしばらく経ったころ、編集部長の後藤郁夫さんから「君もそろそろ企画を立ててみないか、何かいいアイデアはないか」と聞かれた。即座に思いついたのが、赤木先生がかつて雑誌『思想』に 3 回にわたって連載され学生時代に読んで感銘を受けた「17 世紀のリベルタンとデカルト思想」を土台にして本をつくるというものだった。自宅からもってきたその論文を後藤さんに示すと、さっそく読まれて、やってみろということになった。しかし、そう言われても何をどうしていいかわからない。手をつけかねている私を見て、後藤さんはさっさと大阪大学の赤木先生の研究室に電話かけ、アポイントをとってしまった。二人で出かけるのかと思いきや、「誰が電話したかわからないから、キミ、行ってこい」と。そんなわけで、初めて先生の研究室を訪ねることになった。お目にかかると先生は「電話とは少し声が違いますね」とおっしゃりながらも、いろいろ話をしてくださった（はずだ）。はずだとカッコ書きしたのは、そのとき私は緊張のあまりしどろもどろで、お聞きしたこともほとんど頭に入らなかったからだ。窓を背にして座っておられた先生の声

が、逆光の中から響いてきたのだけを憶えている。それでもその後、先生のまわりのかたから、そのときの若造の訪問を先生がとてもよろこんでおられたというお話を聞いて、私は本をつくるときに何がいちばん大切かを学んだように思う。当の論文は岩波書店から出版されることになっていて、実際にも『フランス近代の反宗教思想』の第一部として1993年に刊行されたが、先生は小会では奥様の富美子先生と共著の形で『サロンの思想史』を書いてくださった。女性の視点を組み込み、上記の論文で議論された諸思想を、いわばそれが生みだされた空間ごと論じられたのである。2003年の刊行。『反宗教思想』が出た年の秋にはすでに構想が進んでおられたから、ご執筆に10年の歳月がかかっている。

*

最初の訪問のあと、何度かお会いしたのは、ご自宅にほど近い神戸の三宮だった。商店街にあったゴンチャロフの店に行ってはボルシチをご相伴した。先生はいつもステッキをお持ちになり、時折くるりと回されるのが印象的だった。ご執筆に時間がかかったのは、サロンという主題の深さや広がりということもあるが、やはり阪神・淡路大震災の影響が大きかったと思う。震災直後に御影の高台にあったご自宅にお見舞いにうかがったときには、まだ本棚が倒れ書物が散乱したままで、前日まで京都に避難しておられたとのことだった。三宮の商店街も大きく被災し、再びそこにご一緒することはなかった。大阪大学をご退官後にお住まいを横浜に移されてからは、少しでも高いところには物を置かず、リビングには書棚も置いておられなかった。それでも、あらためて書物と向きあい、立ち直られるようにして書き上げられたのが、華麗な『サロンの思想史』だったのである。ルソーで締め括られるその書物には、先生の自然と文明への問いかけが、まちがいなく込められている。

（名古屋大学出版会・専務理事　編集部長）

赤木名誉教授夫妻渡仏。留学中の学生たちと会食。
パリのレストラン Salut aux artistes にて。1992年3月22日

En perdant Monsieur Akagi...

Agnès Disson

En perdant Monsieur Akagi, nous avons perdu ce qu'on appelait autrefois "un honnête homme" dans sa définition du 17ème siècle : un homme d'une vaste culture, à la fois classique et de son temps — puisqu'il pouvait parler à la fois des Libertins et de Gérard Genette — mais aussi d'une extrême courtoisie et d'une grande discrétion. Il est rare en effet de rencontrer la conjugaison de ces deux qualités : savant et modeste !

Je me souviens aussi qu'une collègue m'avait dit à mon arrivée à Osaka : "En plus, vous verrez, Monsieur Akagi est féministe !" C'était vrai, je l'ai constaté — et il faut dire que c'était rare aussi à l'époque, il y a plus de trente ans.

Je dois beaucoup à Monsieur Akagi, car c'est lui qui m'a engagée à l'Université d'Osaka en 1982, et qui m'a ouvert ainsi les portes d'une carrière très heureuse à la Section de Littérature Française. J'enseignais alors à l'Université des Langues Etrangères de Tokyo, je me plaisais beaucoup au Japon et je souhaitais y rester. Monsieur Hara partait en retraite, et on m'avait demandé si je pouvais faire à sa suite un cours sur Rimbaud, Verlaine et le symbolisme. C'était une chance inouie, et j'ai accepté avec enthousiasme. Mes premiers contacts avec Monsieur Akagi ont été par lettres — à l'ancienne, il n'y avait pas de mails à l'époque — et je me souviens avoir été très intimidée par le français de Monsieur Akagi, élégant, aisé et absolument parfait, au point que je faisais très attention à relire mes propres lettres, de peur de faire une faute d'inattention, qu'il aurait certainement remarquée. D'ailleurs cela s'est peut-être produit, mais je ne l'ai jamais su — Monsieur Akagi était bien trop courtois pour me le dire !

Dans sa dernière lettre, bien après sa retraite, je me souviens que Monsieur Akagi me parlait de Fénelon. Il me disait aussi que sa mémoire commençait à faiblir, et qu'à son grand regret c'etait les mots français qu'il oubliait d'abord, ce qui m'avait beaucoup attristée…

J'ai appris tard la maladie et la mort de Monsieur Akagi, et je reconnais là sa grande discrétion. Je garderai de Monsieur Akagi le souvenir d'un homme exemplaire, que j'admirais beaucoup.

(Professeur étranger à l'Université d'Osaka)

赤木先生を失って ...

アニエス・ディソン

赤木昭三先生を失って、私たちは、かつて――17 世紀の意味で――「オネットム」と呼ばれた存在をも失ってしまった。すなわち、古典と現代の両方に関する広範な教養をもつとともに（赤木先生はリベルタンとジェラール・ジュネットのいずれにも通暁していた）、極度の礼節と慎みをわきまえた人物のことだ。碩学にして謙虚――この二つの資質をあわせもつことの、どれほど稀なことか！

私が大阪に来たばかりのころ、ある女性の同僚が「それに赤木先生は、フェミニストでもあるのよ」と教えてくれたことを思い出す。実際にその通りであった。いうまでもなく、いまから三十年以上も前の当時にあって、これもまた珍しいことであった。

赤木先生は私の恩人である。1982 年に私を大阪大学に招いてくださったのは先生であった。仏文専修における、私のとても幸せな教員生活の扉を開いてくださったのである。当時私は東京外国語大学で教えていて、日本を気に入り、この先も住みつづけたいと思っていた。原亨吉先生が退職されたばかりで、代わりにランボーやヴェルレーヌ、象徴主義について講義してほしいと頼まれたのだった。願ってもない申し出であり、喜んで承諾した。最初のころ、赤木先生とのやりとりは手紙を通じてであった（古風だが、メールはまだなかった）。赤木先生のフランス語には怖じ気づいたものだった。エレガントで、衒いがなく、まったく完璧な文章であった。私は不注意による誤りがないように、自分の手紙を何度も読み返したものだ。間違いがあれば、赤木先生ならきっと気づかれるだろうと思ったのだ。実際気づいておられたことと思うが、それを確かめるすべはなかった。礼節正しい赤木先生が、相手の不注意を指摘されるはずがなかった。

ご退職のずっと後にいただいた最後の手紙で、赤木先生はフェヌロンについてふれておられたことを覚えている。最近はもの忘れがひどくなったとも書かれていた。とくにフランス語の単語が出てこないのが悔しい、と。これを読んで私はひどく悲しくなった…

赤木先生がご病気であったことも、亡くなったことも、あとになって知った。先生らしい慎ましさだと思った。赤木先生は、私が敬愛してやまない人間の鑑として、私の記憶にずっと刻まれることだろう。

（山上浩嗣訳）

Dixit...
—3.11 後、青葉区から待兼山へ—

寺本　成彦

—あの日は、渋谷の “Bunkamura”（時々訪れて、喫茶店で本を読んだりします）に出かけていました。大きな揺れが来て、その後交通機関が不通になり、都営地下鉄の構内で何時間も座って待っていなければなりませんでした。情報が入り乱れて……　横浜の自宅になんとか帰り着いたのは、その日の夜遅くでした。
—最近は歴史の本ばかり読んでいます。
—時々、孫が遊びに来ますが、いたずらで！……
—家内が作ったサンドイッチです。なかなかおいしいでしょう？
—このひとは散歩もせず、ちっとも体を動かしません……　（赤木富美子先生談）
（2011 年 10 月 22 日、横浜のご自宅をお訪ねした折に）

—しかし、フランス、あるいはヨーロッパ中心主義は抜きがたいもので、一例をあげると、少しでもこれに批判めいた研究などはなかなか受け入れられません。この著者二人の研究〔L・ペロネ・モイセス、E・ロドリゲス＝モネガル『ロートレアモンと文化的アイデンティティ』〕が、20 数年経って、やっと市民権を得たらしいことからもうかがえますし、小生、ほかにいくつもそんな例を知っています。
（2010 年 4 月 12 日付私信）

—ロートレアモンというペンネームが、ウジェーヌ・シューの歴史小説『ラトレオーモン』からきているなんて、学部の演習の時間に私が言いましたっけ？
（2007 年 3 月頃の予餞会で）

—夫婦二人で留学すれば、嬉しさは 2 倍に、苦労は半分になります。
（1995 年 9 月頃の私信）

—卒業論文は、“青春の記念碑” です。　（1985 年 3 月頃の予餞会で）

—『マルドロールの歌』の作者はロートレアモンといいますが、それはウジェーヌ・シューの小説『ラトレオーモン』に由来するらしいのです。
（1983 年 10 月頃、『ボヴァリー夫人』講読演習の折に）

—卒業論文は、テクストに向かい合いながら自分に問いかけ、それに対して自分で答えていくことです。　（1983 年 4 月、四回生ガイダンスで）

付記：赤木昭三先生のおっしゃったこと、お便りに書かれてあったことを、あえて断片的に引用するにとどめました。“不肖の弟子” であった私にとり、幾歳月経っても先生の懐かしい声の響きとともによみがえる瞬間のいくつかを綴り合わせてみました。ご冥福をお祈りします。

（東北大学教授）

「無名の思想家たちへの一茎の花」―赤木昭三先生のお仕事を偲ぶ

永瀬　春男

原亨吉先生追悼の催しに出席してからさほど日もおかずに、赤木昭三先生のご訃報に接することとなり、ご指導を受けた者のひとりとして痛恨のきわみである。赤木先生には、専門を近くしていたこともあって、身に余る恩顧にあずかったという思いがつよい。一方で、みずからの非力と不勉強のゆえに、先生のご期待に添えなかった、学恩に十分に報いることがかなわなかったという慙愧の念も、いまさらながら深いものがある。

博士課程を終え、留学のために伊丹空港で渡仏の便を待っていたときのことである。不意に先生が姿をあらわされ、メナール教授へのお土産を託されると、よい論文を書いてきなさいよと、一言だけおっしゃって立ち去られた。ほんの一二分の出来事である。私はわざわざのお見送りに驚き恐縮して満足にお礼も申し上げなかったが、フランス滞在中、そのときのお言葉は重い課題として絶えず脳裏にあった。ところがふがいなくも、二年の留学期間も終わり近いころ、私は先生

赤木名誉教授夫妻渡仏。留学中の学生たちと会食。
パリのレストラン Salut aux artistes にて。1992 年 3 月 22 日

にお手紙を差しあげ、論文を書かないまま帰国しますと忸怩たる思いでお伝えすることになった。先生はさぞかし失望されたことと思う。にもかかわらず、その後白水社からメナール版パスカル全集の刊行が決まったとき、編集者のおひとりとして、私を計算機関連文書の訳者に推薦してくださり、計算機の専門家はいないのですから、あなたがそうなってくださいとおっしゃったのである。訳稿が完成し、その過程で生じた発見をもとに学会発表をし、やがてそうした成果を小著にまとめたときには、少しは喜んでいただけたと思うのだが、伊丹空港でのご指示を果たせなかったという負い目は、長く消えることがなかった。

パスカル物理学の独創性を論ずる先生の一連の論考に接したのは、卒業論文を準備中のことで、当時おひとりで講座の運営にあたられていた原先生のお勧めによるものである。研究のお手本のような鮮やかなお仕事には、論文とはこのように書くものなのかと、目を開かれる思いがしたのであるが、同時に、研究対象に向かう先生の姿勢にも強い印象を受けた。先生は、研究の最初期から、どんな高峰も孤立して存在するわけではなく、その周辺に多くのマイナーな作家・思想家のいること、彼らとの関係を抜きにして突出した才能の独創性をうんぬんすべきではないことを、繰返し指摘しておられた。また、論文はさらりと読み流されるものであってはならず、ごつごつとした手触りをもたねばならないというのも日頃からのご持論であった。そう語られるときの、木の幹の瘤起をなぞるような先生の手つきは、今もよく憶えている。

予餞会・同窓会。1992 年 3 月 7 日

フランスで学位論文を完成されたのち、先生の研究は近代フランス思想を幅広く覆っていくが、とりわけ17世紀末から18世紀前半におけるリベルタン地下写本という未踏の領域の探索は、四半世紀のご研鑽を経て、主著『フランス近代の反宗教思想』へと結実する。この書物の「まえがき」には、リベルタン研究のモチーフの一端が明かされている。「時代の支配的な思想を体現し、あるいは、これに順応する幸福な思想家は、そのこと自体によって、すでに十分な褒賞を享受しているといえるかも知れない。だが、これにたいしてノンと言った無名の思想家たちと、その思想を、忘却の彼方から掘り起こして、これに十分な敬意を払い、これに一茎の花を捧げることは、後に来たわれわれの義務でもあろう。」先生の研究を貫くひそかな情熱を垣間見る思いがして、胸うたれる一節である。

邦訳パスカル全集第三巻は、当初、原先生訳の数学論文、赤木先生訳の物理学論文、それにほんの付け足し程度であるが拙訳の計算機関連文書によって構成される予定であった。敬愛する二人の先生とともに一巻を成すことは私にとってこのうえもない喜びであり、出版を一日千秋の思いで待ち望んでいたのであるが、余儀ない事情から今も刊行のめどが立たずにいる。赤木先生もさぞお心残りであったろうし、私自身も残念でならない。

先生がお亡くなりになる半年ほど前から、武田裕紀さん、山上浩嗣さんと三人で先生のお宅を訪問し、親しくお話をうかがう機会をもちたいと相談していたのだが、先生はご体調がすぐれず二度の延期をご希望になったのち、不帰の客となられた。もう少し早く思い立っていたらと、悔やまれてならない。

（岡山大学名誉教授）

赤木先生と邦訳『パスカル全集』

支倉　崇晴

『パスカル全集』を名乗るブレーズ・パスカルの著作の邦訳は2種存在する。古い方は1959年6月から11月にかけて全3巻が人文書院から刊行された。もう一つは、白水社から1993年11月に第1巻、1994年6月に第2巻が出た後に、諸般の事情で中断している『メナール版パスカル全集』（全6巻の予定）である。

後者はすべて新訳でという方針であったが、数学論文だけは前者においても翻訳を担当された余人を以て代えがたい原亨吉先生に、メナール版に基づくご自身による新訳をお願いすることになった。しかし原先生は、その新訳に着手される前にお亡くなりになった。その結果、2種の全集の両方でパスカルの著作の翻訳に関係されたのは赤木先生おひとりになった。

旧全集には、大阪大学仏文科歴代の和田誠三郎、原亨吉、赤木昭三の3先生が、翻訳者としてそれぞれ貢献されている。もっとも、赤木先生のお名前は、訳者と

して明記はされていないが、原亨吉先生は「数学論文集、解説」の末尾に、「この翻訳や校正にあたっては大阪大学大学院の赤木昭三、坂本賢三両君の助力を得たことを記し、両君の労を多とする者である」と記しておられる。赤木先生ご自身も、原亨吉名誉教授追悼号である『GALLIA』誌 LII 号（2012）所収の「原先生のいくつかのお仕事について」と題する寄稿の中で、「私事にわたって恐縮だが（、、、）当時修士課程の学生だった私と、今は亡き坂本賢三君が、数学論文集の下訳をさせていただくことになり（、、、）」と記しておられる。さらに赤木先生はこの旧版全集第 1 巻の月報に、「パスカルと魔方陣」という文章を寄せておられる。

人文書院版でそのような貢献をされた赤木先生は、白水社版では 4 人の編集者の中心となって、この新版全集刊行の牽引車となられた。第 1 巻では全集全体の「まえがき」をお書きになった上、それに続く冒頭のジルベルト・ペリエ『パスカル氏の生涯』の翻訳と解説、パスカル本人の著作からは『真空論序言断章』の解題・翻訳・解説を担当された。さらに、月報では、「パスカル研究の最近の動向（1）ジャン・メナール『パスカルとロアネーズ兄妹』」を執筆されている。第 2 巻でも、「フェルマからパスカルへの手紙とその返書」の解題・訳を担当されている。未刊の第 3 巻は、パスカルの科学論文および関連文書が収められることになっているが、赤木先生は物理学論文および関連文書の解題・訳・解説を担当されていて、久しい以前に初校ゲラが出たが、そこで作業が止まっている。校正刷によれば、解題は 9 ページ、翻訳と解説は 250 ページに及ぶ大部なものである。この大きなお仕事が、赤木先生の生前に世に出ることができず埋もれたままになっていることは、返す返すも残念でならない。この全集の一日も早い続刊が待たれるところである。（2014 年 10 月）

（東京大学名誉教授）

予餞会・同窓会。年代不詳。

仏文紳士

平田　葉子

陽当たりの悪い、しかしその薄暗さが何とも心地よい研究室。壁を埋め尽くす蔵書の数々。それに伴う本の匂いと、上品で麗しい先輩方が入れて下さる珈琲の香り…。

初めて仏文研究室に足を踏み入れた私は、その優雅で知性あふれる空間に圧倒されてしまいました。そして、いたずらっ子の様な瞳をくるくるさせている柏木先生の横で、正にその研究室の雰囲気の化身のように穏やかに微笑んでおられたのが、赤木昭三先生でした。

私たちが三回生になった年が赤木・柏木体制の初年度だったということで、新入りで訳が分からないにも拘らず、何やら新しいことが始まるワクワク感を感じました。

赤木先生のフローベール「ボヴァリー夫人」講読は、おちこぼれだった私には、衝撃でした。その解釈の緻密なことと言ったら、一回の授業で１ページということなどざらで、逸れた横道の先にも溢れんばかりの教養が詰まっている、有難くも恐ろしい授業でした。「学問とはこういうものか」と背筋の伸びる思いがしました。

また、お人柄は温厚で、普段はとても優しい目をされていますが、仏文学に関することになると、その瞳は猛禽類のそれに変わります。卒論の口頭試問の際、無謀にもスタンダールを選んだ私は、19 世紀のスペシャリストを前に、蛇に睨まれた蛙の如く、すくみ上る破目になったのです。次々に繰り出される鋭い質問に、よれよれになりながらもお答えしていくと、やっと「まあ、院試でしたらね、もう少し突っ込みたいところですが、卒論ですからね。これで充分でしょう。」と、お許しをいただいたのでした。

赤木先生の思い出は尽きませんが、このたびご逝去の報に接し、大変驚き、また、残念に思っております。不肖の弟子ではありましたが、先生の教えを受けることが出来たということは、大変な幸運だったと、今更ながら感じています。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（1985 年度卒業生）

赤木先生を偲んで

松田　和之

勤務先の大学で「フランス文学入門」という名前の教養科目を担当している。受講者は60名ほど。アポリネールの生涯を追いながら、関連する美術や音楽、バレエ等についても講じている。今年はそれに時間を費やしすぎたのか、15回分の授業が終わった時点で、アポリネールはいまだ健在であった。尻切れトンボで終えるわけにもゆかないので、急きょ翌週も授業をすることにした。正規の時間外の授業になるので出席は取らない。そう明言したため、当日、受講者は半分くらいに減っているだろうと予想しながら教室の扉を開くと、5名しかいなかった。動揺を隠して授業をやり終えたのち、学生たちが帰った教室で後片付けをすませてひと息ついた時、ふと大学2年のゴールデンウィークの記憶が蘇ってきた。

ロ号館横の掲示板の前に立っていた。休講通知を確認するためだ。あの頃は、学生と教員の間に「連休の谷間の授業は休講」という暗黙の了解のようなものがあったように思う。折からゴールデンウィークを利用して帰省する予定を立てていたので、何度も掲示板を確認しに行ったのだが、ある科目の休講通知だけがどうしても見当たらない。自主休講にするつもりは毛頭なく、帰省は取り止めにした。飛び石連休の中日に阪大坂をせっせと上り、文学部の教室へ向かう前にいつもの習慣で掲示板に目をやると、その科目の休講通知がしっかり貼られてあった。力が抜けたが、清々しい気分だった。この授業だけは何があっても休んではならない。何の打算もなくそう思える授業に出会えたことが嬉しくて仕方なかった。

「仏文学普通講義」。赤木先生が担当されていた授業である。当時、仏文の専門科目の中で、この科目だけは学部に上がる前の2年次に履修することができた。

予餞会・同窓会。1992年3月7日

赤木先生に初めてお目にかかったのは、第１回目のこの授業の教室においてであった。「普通講義」なので取っ付きやすい授業内容を予想していたのだが、授業の冒頭でいきなり延々と板書されたフランス語の文献名に度肝を抜かれた。訳が分からないまま、意味も分からないまま、懸命にそれをノートに書き写したことを覚えている。博覧強記を地で行く先生の授業には、学生に媚びるところが一切なかった。かといって、先生に孤高という言葉は似つかわしくない。そのどこか鷹揚で温かいお人柄に魅了されなかった者はいないと断言できる。

「仏文学普通講義」を受講した翌年に仏文科に進級して以来、先生には長年にわたってご指導とご厚情を賜った。ご定年退職された後も、研究室の本やコピーを先生にお届けする機会が何度かあったが、その度に、雑用でも何でも、先生のお役に立てることに密かな喜びを感じたものである。横浜に転居されてからは、お目にかかれる機会がめっきり減ってしまった。それでも毎年、年賀状を通じて温かい言葉をかけて下さり、年の初めに先生の存在を身近に感じることができた。だが、今となっては、それももう叶わない。目をつぶり心の中で襟を正して先生に尋ねてみる。先生は今、どこにいらっしゃるのですか。人間にとって最大の謎である死を、先生はどのように見極められたのですか。それは一体どのような現象であったのでしょうか。先生のあのはにかんだような笑顔が、一瞬、脳裏に浮かんで消えた。

（福井大学教授）

予餞会・同窓会。1994 年 3 月 5 日

敬愛する赤木昭三教授への感謝

森川　甫

パスカル研究を志して、和田誠三郎先生の指導を受けるため、大学院に入学した時、赤木先輩が大学院に在籍しておられた。主任教授の和田先生は男子大学院生には毎年一回、学会発表を実行するよう命じられた。学識も経験も乏しい私は、赤木先輩に倣って努力した。『パスカル全集』全三巻（人文書院　1959 年刊行）が出版された時、和田先生の下で赤木先輩は重要な、そして、私は小さな下働きを命じられた。赤木先輩が助手に就任され、やがてフランスに留学される時、パスカル関係の蔵書の一部を譲っていただいた。二年後、赤木先輩がパリ大学博士の学位を取得されて帰国された時、私は留学の準備をしていたので、学位論文の題目について相談に乗っていただいた。当時、*Les Pensées* では受け付けられないということであったので、*Les Provinciale*s de Blaise Pascal et la pensée théologique de Port-Royal et des Jésuites とした。Jean Guitton 教授の examen oral を受け、学位論文提出候補者名簿に登録され、Henri Gouhier 教授の指導を受けることになった。Gouhier 先生の定年退職後、Jean Mesnard 教授が指導教授となり、*Les Provinciales* de Blaise Pascal et les réponses des Jésuites という題目が与えられた。存在していないとされていたイエズス会のフランス管区長からローマのイエズス会本部への報告記述を発見して、学位論文提出の準備が整った。Padre Pitau のご紹介で、古文書館に入ることが許された御陰であった。1988 年、Pascal *Pensées* セミナーが関西学院大学で開催され、歓迎パーティの席上、赤木教授から、学位論文を日本におけるパスカル研究の二大中心の一つ、大阪大学に提出するようお薦めを受けた。当時、日本の大学で文学の分野で学位論文を提出するこ

予餞会・同窓会。1999 年 3 月 6 日

とは極めて難しいと思われていたので、赤木教授の寛大なお薦めに非常に感激した。指導教授のメナール先生にお伺いを立てると、まず大阪大学に提出し、次に、パリ・ソルボンヌに提出するよう指示してくださった。メナール先生のお許しを得たので，フランス語で執筆していた原稿を睡眠3、4時間の日々を重ねて、日本語に書き改め、何とか締切日に間に合わせた。この日本語論文を提出すると、フランス語論文を準備する気力を喪失してしまった。*Les Pensées* に関する論文を執筆したいという気持ちもあった。赤木教授の温情あるお薦め、また、審査に当って下さった大阪大学の審査官の方々の寛大さのお陰で、学位を受けることができた。

赤木先生が加わって編集されていた『メナール版パスカル全集』に収められている拙訳『イエス・キリストの生涯の要約』を改訳して単行本として出版するに際して、二通の、配慮に満ちた助言を頂いた。それから間もなく他界されたことを知り、愕然とした。

敬愛する赤木昭三先輩のご冥福と、富美子御夫人、御遺族の上に神の豊かな御慰めを心よりお祈り申し上げます。

（関西学院大学名誉教授）

赤木昭三先生の思い出

渡邉　洋一

赤木昭三先生からは教養部の時から薫陶（くんとう）を受け発音を正しく矯正（きょうせい）されました。（フランスの人はHの発音ができないそうです。）

フランス語も日本語も同音異義語が多く（例（たと）えば海（Lamer）と母（Lamère）柿と牡蠣（かき））動詞を制する者は仏（フランス）語を制するとまでいわれています。

赤木先生は外國語を学ぶには、動詞と語順と冠詞を学ぶ事が大事だと言われていました。

（例えば Je suis,（ Tu es ）, Vous êtes, Il est, Elle est, Nous sommes, Vous êtes, Ils sont, Elles sont、直説法現在　英語では I am, You are, He is, She is, We are, You are, They are となります）

これも故岸本通夫教授から習ったことですが例えば中学校の教科書に我々は（We）みます（see）9つ（nine）星々（stars）空に（in the sky）. と言ふのは、「空にここのつ星がみえています」と訳したらわかりやすいそうです。

「今日は寒いね」とか「今日は暑いね」とかいふのは Il fait chaud, Il fait froid といふそうです。

論語に子路が孔子に「もし先生が政治をなすのをまかされたら、先生は何を先にされますか？」と問うたのに対し、孔子は「先づ名を正すことから始めん」と

答えられたそうです。

「大義名文、名声、名作、名利」と「日本語」も「漢字」も「英語」「仏語」「独語」も勉強すればする程更に更に面白いものです。（説問解字、康熙字典）

これも逸話ですが、「コクトーがラディゲをコルク栓のつまった部屋に閉じこめて『ドルジェル伯の舞踏会』という傑作を書かせたそうです。」

日本でも「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とす」と言った宮本武蔵が三年間天守閣に蟄居の状態で、武芸一般、古典を読まされたという歴史があります。

＊

赤木先生の履歴を見ますと、まづ京都大学の法学部を卒業されました。

だから「感情教育」――フローベール著等はお手のものだったのかもしれません。

＊

私が肺門リンパ線になって大学院を休学していた時、「誰が何歳の時に何を書いたかが大事だ」と申しますと、赤木先生も大きくうなづいておられました。ちなみに私はその時、たしか、「論語」の「顔淵篇」と「孟子」の「尽心篇」とをあげつらったと思います。

フローベールが弟子のモーパッサンに「一本の樹木を描くのにも、それが他の一本の樹木とどう違うのか、よく考えて、文章を書け」と助言したそうです。

父の申します処では、フランス文学、詩、音楽、芸術一般をする人には、晩年、精神錯乱におちいる人が多いそうです。（例えば、モーパッサン―精神病院でなくなったと云われている。自死を選んだネルヴァル↔海老をつれて散歩をしていたという、川端康成、三島由起夫……）

＊

安岡正篤師はこれを文明と文化という風に言いかえられておられます。安岡正篤一日一言によると、文明とは　民族の施設外観をいひ　文化とは民族の創造力をいう

自由自在に時間を駆けめぐるようですが「時とは何ぞや？」という問題は非常に大きな問題です。

ガリア L2010 に井上直子女史が「ヴァレリーと時間」という好論文をのせておられますが、私の知る処ではヴァレリーの「過去は現在と未来との狭間にある」とか Yesterday is a History, Tomorrow is a mystery, so today is a gift. といふ逆説的な表現におどろかさせられました。

結論

話を元にもどしますと、赤木昭三先生という肉体は朽ち果てられましたが、その精神や魂は、多くの人の胸の中に、或いは赤木昭三先生の著作の中に勇躍されていると思います。

（完）

私は赤木昭三教授の
驚異的な記憶力
抜群の独創性
したたかな想像力
に敬意を覚えます
平成 26 年師走

（1972 年度卒業生）

卒業記念写真。上：1983 年、下：1984 年

卒業記念写真。上：1985 年、下：1986 年

第35期卒業生
(昭和62年卒)

第36期卒業生
(昭和63年卒)

卒業記念写真。上：1987 年、下：1988 年

第37期卒業生
(平成元年卒)

第38期卒業生
(平成2年卒)

卒業記念写真。上：1989 年、下：1990 年

卒業記念写真。1991 年

原亨吉名誉教授の傘寿、赤木昭三名誉教授の古稀記念会。1997 年 3 月 15 日